

令和 5 年 6 月 8 日現在

機関番号：12603

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K18499

研究課題名（和文）南アジア地域における英語変種「ヒングリッシュ」の解明

研究課題名（英文）Unveiling "Hinglish" language in South Asia

研究代表者

萬宮 健策（Mamiya, Kensaku）

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授

研究者番号：00403204

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、最近日本国内でも注目されている英語変種「ヒングリッシュ」とは何かを解明することを目的とした。インドや南アジア地域で話されている英語が「ヒングリッシュ」と同義で用いられることも多いが、インドには多様な民族が居住しており、異なる言語を用いて生活している。そのような人びとが用いる英語や、自らが用いる言語と英語との併用状態を「ヒングリッシュ」と一括りに扱うことには無理がある。したがって、本研究では、「ヒングリッシュ」をヒンディー語母語話者（ヒンディー語を第一言語として用いるものも含む）が用いる英語変種と規定し、その特徴を観察するための基礎的研究を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の研究期間の大半が新型コロナウイルス蔓延の時期と重なっており、現地調査の計画を再考せざるを得なくなり、申請者が有していた語彙の分析が研究の中心となった。しかし、その成果は『ウルドゥー語 - 日本語語彙集』（東京外国語大学拠点南アジア研究センター、2022年3月）として、語彙集に含める形で出版することができたほか、研究期間中に実施した東京外国語大学でのTUFSCinemaと称する世界各地の映画上映企画における南アジア映画特集の中でも字幕制作等に反映させることができた。これらの成果は社会への還元としては一定の価値があるものと判断できる。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study was to elucidate what 'Hinglish' is, an English variant that has recently attracted attention in Japan. Although English spoken in India and South Asia is often used synonymously with 'Hinglish', India is home to a diverse ethnic population living in different languages. It would be unreasonable to treat the English used by such people, or their own languages in combination with English, as 'Hinglish' all together. Therefore, the present study defines 'Hinglish' as the English variant used by native Hindi speakers (including those who use Hindi as their first language) and conducts basic research to observe its characteristics.

研究分野：社会言語学

キーワード：ヒングリッシュ 南アジアの英語

1. 研究開始当初の背景

日本で、「インド英語」という表現が使われ初めて久しいが、その実態解明は進んでいない。本研究申請者の専門はウルドゥー語を初めとする現代インド・アーリア諸語(New Indo-Aryan Languages)だが、その言語の話者の多くは英語を理解し、使用しており、いわゆる「訛りの強い」英語として一括りにされがちであった。一方で、ウルドゥー語、ヒンディー語をはじめとする、イギリスによる長期支配を経験している南アジア地域の各言語には、英語からの借用語が大量に取り入れられ、相互に影響を及ぼしていると指摘できる。具体的には、一部の語彙をあえて英語で用いる、あるいはウルドゥー語で話していたかと思えば、いつの間にか英語に切り替わり、またウルドゥー語に戻っているという、語、文単位でのコードスイッチングをしばしば経験する。あるいは、ウルドゥー語を話しているのかと思ったら、いわゆる訛りの強い英語だったということも少なくない。

本研究の着想に至った背景は、こうした南アジア地域の複雑な言語事情にある。ウルドゥー語(およびヒンディー語)という南アジア地域の共通語としての役割を果たす言語の専門家として、この地域の英語を言語学的に分析する、という観点はこれまでの研究にない点であり、挑戦的研究の価値を有すると思料する。

日本国内では、榎木蘭鉄也「インド英語のリスニング」(研究社、2012)や、榎木蘭鉄也「インド英語のツボ」((株)アルク、2016)が、インド英語を対象にしているが、学術的な研究書ではなく、一般向けのインド英語紹介に留まっており、本研究の意義は大きい。

2. 研究の目的

本研究の目的は、英語の一変種でありながら、その実態が明らかでないインド英語の言語学的特徴を明らかにする点にある。具体的には、本件申請者の専門であるウルドゥー語(およびヒンディー語¹)との音韻・統語面での比較を行うことで、その特徴を明確にすることを目的とする。

日本でも「インド英語」やヒングリッシュという名称で知られ始めているが、言語学的な観点から研究対象にはなっていない。そもそも、インド英語という名称で呼ばれる言語は誰が話しているものなのか。本研究で扱うのは、北インドからパキスタンにかけてヒンディー語やウルドゥー語を主として用いる人びとが話す英語(本研究では、この言語をヒングリッシュ(Hinglish)と呼ぶことにする)に限る。インドやパキスタンを初めとする南アジアは、多言語多民族であり、英語にも彼らの母語の影響が強く出ていると指摘される。しかしながら、南アジアでは系統が異なる言語が話されており、それを一括りに「インド英語」として扱うことには無理があると判断したからである。もちろん、ヒンディー語話者といっても、地域による差異(いわゆる方言間の違い)や、英語の学習歴により、大きな違いがあることが想像できるため、情報提供協力者の選定の際には、注意をする必要がある。

ヒングリッシュの言語学的な分析を行うことで、英語の変種としての位置づけが明確になる。また、数億単位の話者人口を有すると考えられるヒングリッシュの分析をおこなうことは、日常生活にも英語を使用する、比較的社会的地位が高く、かつ経済的にも余裕があり、今後のインド

¹ ウルドゥー語とヒンディー語は、言語学的に同一言語の社会的変種という位置づけで、どちらかを学べば、口語レベルでは問題なく双方が理解できる関係にある。ただし、表記する文字は異なるため、通常は別々の2言語として扱われる。

やパキスタンを牽引していくであろう社会集団の理解にもつながるのである。

3. 研究の方法

本研究では、申請者が研究代表者となって1名で行なった。(1)これまでに申請者がインドやパキスタンなどの現地調査で蓄積してきたデータの精緻化と、(2)それら現地調査をとおした、実際にパキスタンや北インドで用いられている英語(ヒングリッシュ)の新たな言語データ収集・分析とその結果の公表が中心となる。ただし、本研究の研究期間の大半は、新型コロナウイルス蔓延と重なっており、申請当初に考えていた海外での現地調査の計画が達成できなかったことは指摘せねばならない。

したがって、実際にはこれまでに申請者が収集した、ウルドゥー語(広義ではヒンディー語も含むと考える)への英語からの借用語彙の分析が研究の中心となった。同義の従来からある語彙との使用状況比較(具体的には、たとえば「車」を示す借用語彙 *kār* (car からの借用)と、従来から用いられている *gārī* との使い分け)や、借用語彙の発音の変化(具体的には、「駅」を示す借用語彙 *station* の語頭の子音連続をどのように発音するのか)を中心に分析を進めることとした。

4. 研究成果

本研究によるこれまでの主な研究成果として以下のものを挙げる。

(1) ウルドゥー語 - 日本語語彙集 (東京外国語大学拠点南アジア研究センター、2022年)

本研究の成果としては、まず『ウルドゥー語 - 日本語語彙集』を挙げる。本書は、収録総語彙数が約1万8000と、これまでの語彙集に比べて多く、特に現代南アジア世界で話されている言語を反映させるため、急速に増加している英語語彙を意図的に含めることとした。日本語にカタカナによる英語などの外来語が多用されているのと同様に、ウルドゥー語やヒンディー語においても、英語からの借用語彙は決して無視できない状況にある。本研究申請者の専門がウルドゥー語であることから、出版物のタイトルにも「ウルドゥー語」と表記されているが、本書に含まれる英語借用語彙や基礎語彙はヒンディー語との共通語彙も少なくなく、南アジア地域の共通語の語彙集として活用が期待できる。

(2) 世界の公用語事典 (丸善出版、2022)

本書は、世界の公用語に関する概説書であり、申請者はウルドゥー語の項目を担当した。本研究の成果が明確に現れているわけではないが、項目執筆にあたり、本研究の成果と言える英語からの借用語彙の急激な増加を考慮した点は指摘しておく。

(3) 語学研究所論集への投稿

申請者が所属する東京外国語大学に設置されている語学研究所では語学研究所論集を定期的に発行している。「ウルドゥー語の情報標示の諸要素」(2021)、「ウルドゥー語の否定、形容詞と連体修飾構文」(2019)を投稿(査読あり)し、提供した例文には、本研究の成果が含まれている。

(4) ニューエクスプレス プラス ウルドゥー語 (白水社、2019)

申請者は、共同執筆者であり、増補にあたり可能な限り、用いられている語彙を中心に見直し、より自然な例文等を提示するよう心がけた。本書は一般の学習者も対象としているため、含まれる語彙等は、できるだけ日常的に用いられているものを収録した。結果的に、本研究の成果でも

ある、英語からの借用語彙を含めることとなった。

先にも触れたとおり、本研究の研究期間は、新型コロナウイルス蔓延と重なっており、当初計画したとおりの現地調査ができなかった。したがって、今後の課題として、インドやパキスタンなど現地で実際の言語使用状況に触れての情報収集が必要となる。また移民として第三国に居住する人びとの英語使用状況にも目を向けるべきではないか、という新たな関心分野もできたため、今後の研究課題として、発展させていくことを考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 萬宮健策	4. 巻 25
2. 論文標題 ウルドゥー語の情報標示の諸要素	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京外国語大学語学研究所論集	6. 最初と最後の頁 201-206
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Kensaku Mamiya	4. 巻 1
2. 論文標題 Urdu education in Japan: the situation and our suggestion	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Preservation and promotion of Urdu in today's global context	6. 最初と最後の頁 279-282
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 萬宮健策	4. 巻 23
2. 論文標題 ウルドゥー語の否定、形容詞と連体修飾複文	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京外国語大学語学研究所論集	6. 最初と最後の頁 39-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 MAMIYA Kensaku
2. 発表標題 Research and Education of Urdu in Japan
3. 学会等名 Education of language: possibilities and discussions（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 MAMIYA Kensaku
2. 発表標題 Japanese Haiku in Urdu language
3. 学会等名 International Webnar: varieties of literature: past, present and future (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kensaku Mamiya
2. 発表標題 Beyond Colonial Intermediary: A New History of the Princely State of Hyderabad 's Relations with Japan
3. 学会等名 AAS-in -Asia 2020 (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 MAMIYA Kensaku
2. 発表標題 日本におけるウルドゥー語教育の現状及び日本からの提案 (発表はウルドゥー語)
3. 学会等名 World Urdu Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 萬宮健策	4. 発行年 2022年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 -
3. 書名 世界の公用語辞典	

1. 著者名 鈴木斌、萩田博、萬宮健策、村上明香	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東京外国語大学拠点南アジア研究センター	5. 総ページ数 745
3. 書名 ウルドゥー語 - 日本語語彙集	

1. 著者名 鈴木斌、萩田博、萬宮健策、村上明香	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東京外国語大学拠点 南アジア研究センター	5. 総ページ数 732
3. 書名 ウルドゥー語 - 日本語語彙集	

1. 著者名 萬宮健策	4. 発行年 2022年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 409
3. 書名 世界の公用語辞典	

1. 著者名 萩田博、萬宮健策	4. 発行年 2019年
2. 出版社 白水社	5. 総ページ数 163
3. 書名 ニューエクスプレス プラス ウルドゥー語	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------